
哀玩人形

ちぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀玩人形

【Nコード】

N0956A

【作者名】

ちぐ

【あらすじ】

病院の庭を歩いていた俺、塚松は、踊る少女を見つける。狭い狭い小窓から始まる恋と崩壊のお話。

第一話 崩壊開始

真つ暗な場所が内臓にのめり込む。

吐き気を催し頭痛は絶えず、全てが暗闇に沈んでく。

絶望と呼ぶにふさわしいこの場所を、逃げ出す術を見つけた時、自分は既に崩れていて、世界はやはり絶望だろう。

ぼーっと歩いていたら、可愛らしい少女の姿を見つけた。
くるりふわりと舞い踊り、軽やかなステップで無音の旋律を奏でている。

「なにしてんの？」

多分これが最初の言葉。

自分は徐々に壊れてゆき、崩壊は全てを癒してく……。

まだ春空が肌寒い頃。

俺はとある病院の庭に来ていた。

「なあ、なにしてんの？」

もう一度聞いてみた。しかし返事はない。窓枠の中の彼女は無言で踊り続けるだけだ。

おかしいなあ……窓は開いてるから聞こえてるはずなんだけど……

…。

「おーい」

他人にしつこく問うのは失礼だろうかと思ったが、どうしても気になる。

もう一度聞こうと思った時、

「え、あたし!？」

必要以上の驚きは、旋律を止めてやつと俺に伝えてくれた。

「あ、気付いた。うん、そうそう。アナタアナタ」

「……あなた……見えてたんですか……？」

「ああ、うん」

庭に隣接する民家の小窓の奥……とても目立たない所に、彼女の姿はあった。

窓は庭に面していたが、低い植木の陰になっている。真面目に歩いていたら見落としそうな場所だ。多分俺みたいにはうつとしていないと見付けられないだろう。

「えっと……何って……、見てわかりません……？」

言われてみればそうだ。見ればわかる。

「あー……いや……」

まずい……これじゃあただのナンパだ。いや最初からただのナンパなのか？

とりあえず応えてくれたんだ、何か言わないと……

「どうしてそんな所で踊ってんだろうと思つてさ。ここって庭の奥の方だからあんま人來ないから……もっと人に見える場所とかでやんないの？」

「え……人に……ですか……？ あたしにはこのスペースが精一杯です……」

彼女は肩を落とし、両手で窓枠を示して言った。

うつわ狭っ!! 謙虚!!

「何で!?! 絶対色んな人に見てもらったほうがいいって! 凄いい綺麗だったよ?」

「…………でも、自信無いです…………すみません…………。っていうか、えっと…………失礼なんですけど、あなた…………誰ですか…………？」

この時の彼女は何も知らない。

俺の目がどんな風に彼女を映していたのかも、

俺の精神が確実に崩壊していることも。

第一話 崩壊開始（後書き）

第一話、読んでくださってありがとうございます!!

つたない文ですが、感想を頂けると嬉しいです（^-^）

ちなみにこれは学年末テスト真っ只中に書きました・・（笑）

第二話 小窓ごしに

「よ、バイオレット!」

「塚松君……? こんにちは」

並木道が葉桜に染まる頃。

俺は毎週のように彼女の元を訪れるようになっていた。前々から毎週土曜に入院している弟のお見舞いに来ていたので、ついでに彼女のダンスも見に来ることにしたので。

会う場所はやはり病院の庭に面する小窓ごし。

あーいつ来ても狭いー

「なんだかすみません……毎週付き合わせてしまつて……」

「え!? 謝ることないよ!? 俺が好きで来てんだからさ、そんな気にすんなつて!」

「でも……」

「いーいからいーから!! ホント俺毎週楽しいからさ! な
?」

「そうですか……?」

「うん、そうそう! ほら、練習始めよ!」

「……はい! ……ありがとうございます……!」

彼女は声を明るくして、大袈裟にぺこっと頭を下げた。長い茶色の髪が床につきそうになる。

可愛いなあ。

「じゃあ、先週の曲でやりますね」

「はいはい、しっかり見まーす」

控えめな音で、曲が始まった。キラキラして可愛いらしい曲。しかしどこか謎めいた調べ。

結構単調な曲ではあったが、俺は音に合わせて足の先でとんとん

とん、とりズムをとる所がなんだかとても気に入って、数種類見せてもらった物の中でもかなり好きな踊りだった。

この踊りはまだ上手く出来ないらしく、最初に見た物よりずっと不格好にしか踊れていなかったが、一生懸命さには魅力があった。というか、バイオレットは目が見えていないらしい。

自分ではつきりと言わないが、会話中もちゃんと俺の目を見付けられずにいつも変な方を向いているし、よく意味も無く窓枠にぶつかるので、多分そうなのだろう。

それなのにこんな風に踊れるなんて……かなり凄い。

バイオレットは舞う。

「あつ」

旋律が止まる。足がもつれて転んでしまった。

「大丈夫？」

「大丈夫です。すみません……。いつもここでやっちゃいますね……先週も失敗したのに……」

突如弱くなる声。反省と悔しさが彼女を襲い、激しい自虐が刻まれそうになる。

「まーまー、すぐ出来るようになるって！ 気長にいこ！ それに、先週よりも大分上手くなってる。そんな心配する事無いって！」

「ホントですか……？」

「ホントホント！ なんかさ、あのーあれだ、よく祭とかで売ってるやつ……こんぺい糖？ みたいだった。あの『とんとんとん』って所がさ」

「ホントですか！？」

突然彼女の声が明るくなった。

こんなに大きな声が出せるとは思っていなかったからか、かなり

びつくりした。

「う、うん、ホントだけど？」

「嬉しいです……！」

後で聞いたところ、あの曲は『こんぺい糖ナントカ（なんだったっけ？）』とか言うらしい。

しかしそんな事を全く知らない俺は、『こんぺい糖がそんな嬉しいもんなのか？』と不思議に思いながら再び舞い始めた彼女を見ていた。

「どう？ 人に見せるのには結構慣れた？」

『バイオレットを人目に慣らすこと』。それが俺の役目だった。全く、我ながら素晴らしい口実を思い付いたものだ。

「いえ、まだちょっと……やっぱり人が見てると思うと緊張してしまつて……。そこまでは技術が追い付いてないと思いますし……すみま、……頑張ります！」

「そつか、頑張れ。まあ気長に行こ、な！」

痛いほど真面目で頑ななバイオレット。

少しずつ、自虐的な面を減らしてあげられればと思った。なんだかそれが俺の役目のような気がした。

……いや、ただの自己満なんだけどさあ……。

平和な休日、小窓越しに彼女を見る。

この狭い空間が、今の二人の全てだろう。

第二話 小窓ごしに（後書き）

『こんぺい糖ナントカ』って言うのは、よくバレエで使われる『こんぺい糖の踊り』（だと思うのですが・）の曲の事です。

2005年3月現在はFAXのCMにも使われていたりしますよ（
^ - ^）聞いたことがあるのでは？

第三話 アイス

夏がもうすぐそこまで迫っている頃。

今日も『こんぺい糖ナントカ』のダンスを見せてもらった後、蒸し暑くじめじめする庭で棒アイスを食べていたら、バイオレットが今まで一度も訊かなかった事を訊いてきた。

「塚松君……弟さんの調子は、どうですか……？」
アイスが垂れる。

「……んあ？ ……あー……あいつ？ なんかそんなに重大な病気って訳じゃなさそうんだけど、うわっ、なかなか退院できないんだよなー。でも、まあ大丈夫大丈夫、っと、うん、大丈夫！ バイオレットが心配する事じゃないよ」

「……？ そうですか……？」

バイオレットは俺が必死に下へ下へと向かおうとするアイスと格闘していることが分からなかったらしく、怪訝に首を傾げられてしまった。ごめんごめんと説明する。

「あはは、そうですか。……弟さんが大丈夫そうでしたです。塚松君春からずっと来てるから、弟さんも病気が長引いてるのかな、と思って……」

「んー……あー……そうだよなあ。考えてみたら、あいつが退院してたら俺病院に来てないもんな。あれ、でも、そうなる……」

弟が退院したら、……会えなくなる？

「……」

会えなくなる。

彼女は俺と同じようにそれを思っ
て沈黙してくれているの
だろう
か？

いや、違つかもしれない。違
うだろう。思い上がりだ。
でも、どうしても現実だと思
いたい気持ちは胸を熱くさせ
る。

「……ま、まあさ、あいつが
退院しても来れないわけじゃ
ないし、
あー……」

だんだん自分が何を言っている
のかが分からなくなってきた。
ただ顔が熱く紅くなってゆく
事だけが分かる。

あーっ！！　なにやってんだ俺
ーっ！！

「……会いに……来てくれま
すか……？」

「え？」

「あ、いえ、違、じゃなくて、
な、何でもないですー！！」

彼女は慌てて両手をぶんぶん
振りながら言った。

うわ……っ

「……うん、会いに来るよ」

「……っ……あ……、ありが
とっございます……！！」

ぼとっ

「わーっ！！」

今日の勝負はアイスの勝ちだ。

バイオレットに気を取られて
しまった、俺の負け。

今回は彼女も何が起こった
のか分かったらしく、くすく
すと笑われてしまった。

あーだから……、なんでそ
んなに……

アイスが無くなった棒が、手からはなれる。

思わず手を伸ばして、髪に触れる。

「可愛いなあ」

あれ、今俺何言った？
え！？

バイオレットは動かない。石のように固まってしまった。
うわぁーやっちゃまったよぉー！！！！おかぁーさーん！！

「……手が……」

「え？ 手！？ あ、ごめっ」

慌てて髪から手をはなす。

うわぁそんなに駄目だった！？ そんなにやばかった！！？

「あ、違っんです！ あの、触ったから……、」

「ごめんっ、ホンツト悪い！！」

ナンパを超えてセクハラか！？ え、もしかして俺痴漢！？

「そうじゃないんです！ ただ、手が、……塚松君の手が、見え
たんです……」

「……へ……？」

見えた？ 手が？

「……じゃあ、こうすれば……俺の顔も見えるかな……」
「え？」

衝動を抑えるのには、まだまだ俺は若すぎて。
気が付いたら窓の奥まで手を伸ばしてて。
目を閉じて。

一瞬 触れた唇は、温かくはなく。

「……顔、が……、」

「……見えた？」

「……はい……っ……！」

触れさせて。触れれば感じて見えるなら。
俺を見て。どうしても君が好きだから。

……痴漢って叫ばれなくてよかった……；

心配しないで。会えなくなる日は来ないから。
あいつが退院する日は、来ないから。
でも、この時の俺には、それさえもわからず……。

帰り道。

看護師の哀れむ囁きは、俺の耳には聞こえない。

アイスは溶けて、原型はもうわからない。

第三話 アイス（後書き）

なんか凄いですねー、塚松君。積極的ー！！てか暴走気味ー！！（笑）

それにしても、男の子目線が上手く書けているか心配です；
塚松の喋りやモノローグがキモかったらすみません
（^^；）

第四話 s e e

蝉の音がどこまでも響きわたりそうな頃。

夏の気温は、涼しげに思える病院であつてもやはり暑くて、さすがに日差しの下に長時間居るのは辛かったが、それでも俺はまだバイオレットの所に通っていた。

悲しくもあれから俺達の関係にあまり大きな変化は無く、ダンスを見てからくだらない話をすると言う単調なスタンスがいまだ続けられ、とうとう第一回期末テストの時期が来てしまった。

「ごめん、バイオレット！ 来週からまたテスト週間に入るから、来週・再来週と来れなさそうなんだ。悪いな」

「え？ 塚松君も来週からなんですか？ あたしも来週からテスト週間なんです。偶然ですね、中間の時も同じ時期でしたよね……？」

「あー、そういえばそうだったな。そういえばさ、バイオレットはこの高校に通つてんの？」

実は、俺はこれまでバイオレットがどこの学校に通っているのかわからなかった。

ひとつ下の学年……今年高校1年になるという事は大分前に聞いたのだが、その頃季節はやつと入試の合格発表が終わるくらいだったので、なんだか聞き辛かったのだ。

「あれ、言つてませんでしたか……？ 東条高校です」

「東条！？ 俺もだよ！？」

「ええ！？ じゃあテストつて……11日からですか？」

「うん、そうそう！ バイオレットも東条だったのかー」

この地域では『まあまあな方』と、とても微妙な評価をされている市立東条高校。

自分は第1志望で入ってきたが、バイオレットはそうではないという可能性は否定できないような所だ。あの時間なくて正解だったかもな。

「階が違っただけなのに会わないもんなんだな。全校集会の時とかに見ててもよさそうなのに……」

「そうですね……。あ、でも、会っても塚松くんには分からないかもしれないね」

「え？ なにが？」

「あ、あたしの事です。塚松君はあたしの声しか知らないから、すれ違っても分からなくないですか……？」

声しか知らない？ 俺が？ バイオレットの？

「？」

「ええ？？ ち、違いますか……？」

「俺にはちゃんとバイオレットの顔が見えてるよ？」

自分は目が見えないから、俺にも自分の顔が見えていないと思い込んでるんだろうか？

「ええ！？ 見えてる！？ どこからですか！？」

焦りながら変な所をきよるきよるとまわすバイオレット。

おいおい……

動きがおかしいが、そんな姿も可愛らしく思えてしまう。

自分の顔の筋肉が自然と緩んでゆくのが分かる。

「それより、バイオレットの方が俺を探しにくいんじゃない？」

自分自身こそ、俺の事は、声と、手と、……唇の、感触しか知らないのだから。

うわぁ恥ずかし！！ こんな事絶対言えん！！

「そうですね……顔は1度しか見てないから……いえ、でも大丈夫です！ 多分、分かります……！」

遠回しにもう一度キスをするのを避けられたと思うのは気のせいでしょうか。うん、気のせい……で、あつて欲しい。

「あれだけで分かるんだ？ バイオレットは凄いなあ」

「い、いえ、そんな……だって……」
「？ うわっ！！」

『だって』。その続きは、たった今出現した蚊と戦い始めた俺には予想できなかった。

だって、好きな人だから、見つけれないわけがないじゃないかな
い

……撃退完了。今日は俺の勝ちだ。

「ふう。な、バイオレット、じゃあさ、今度学校で会わない？」
別に軽い気持ちだった。軽い言葉のはずだった、が……

「え……」

突然彼女の声が曇る。

え……？

「え、あ、いや、嫌だったらいいよ？」

「……ごめんなさい、……すみません……」

ショックだった。でも、会つのを断られた事以上にショックな事があつた。

久しぶりに聞く、彼女の『すみません』。

そんな事言わせてごめんと言いたいけれど、言ったらまた謝罪の言葉を聞かされそうだったから、やっぱりやめた。

ねえ、『ごめんなさい』の後の『すみません』は、一体なにに謝
つてるの？

どうしたら救えるの？

小窓の外から出来る事は、あまりにも少なくて……。

「……」
「あ……、まあ、さ、気にすんなって！いつもここで会ってるからわざわざ学校で会う事もないもんな、ごめん！それよりさ、……」

突然の、不安

つい先程まで通っている学校さえも知らなかった俺は、はたして彼女の何を知っているのだろうか？

やっぱり、1度だけでいい、少しだけでいい。学校の、普段の彼女を見たいと思った。

そうすれば、何が彼女を苦しめるのか、分かるような気がしたから。

でもやっぱり、

『ネエ、ドウシテ会イタイツテクレナイノ？』

これが一番聞きたかったのかもしれない……。

崩壊は激しすぎて、違和感をも殺してしまう。

俺が崩壊に気が付くのは、もう少し後の事。

『キミはみえてない？』オレはみえてない。

キミは見えてない？キミはみえてた。

see?

第四話 s e e (後書き)

長かったです！！本当は2～4話までがもつと短くひとつの塊になるはずだったのですが、ここまで長くなってしまいました；
何と言つか、グダグダですねえ；すみません；

第五話 塚松

月曜の活気と、休み明けの少し気だるい雰囲気がちこめる頃。

俺は運動場のベンチに一人で座っていた。

……もちろん、バイオレットを探すために。

「つーかーまーツううあにーっ！ー！」

ばーん

「ぶふわっ、なんだよお前、いてーよー！ 声でけーよ！」

静かに彼女を探そうと思っていたのに、予想外の襲撃があった。

今日の対戦相手は親友と呼べる奴。どうやら俺には戦うべき相手が
多いらしい。

俺を叩く音とこいつの声は相当大きかったらしく、少しづつ集ま
ってきていた生徒から注目を浴びてしまった。

「何だよー別にいいだろー？ スキンシップさ！」

「いらん！ 悪いけど今俺人探してんの！ 邪魔すんなー！」

「まーあ塚松兄つたら、冷たいわねっ！」

「……キモいよお前……」

バイオレットは見つからない。

「で、お前、誰探してんの？」

「誰って……」

首を右へ左へと振りながら運動場を見渡すが、やはり彼女は見あ
たらない。まだ来てないのかな……。

「あ！ わかった！ 女だろ？ 片想いだろっ！」

「な！？ なんて分かるんだよ！？」

思わず奴の方へ余所見をしてしまった。

「何、図星？」

しまった……

「……そつだよ……」

「な、なんだあー好きな娘居たんなら俺に言えよー！」

「なんで言わなきゃなんないんだよ……大体、お前に言ったら言いふらされそうだし」

「酷！！ うっわひつど！！ 塚松兄酷い！！ このオレがそんなに口が軽いと思うかい！？ この優しいオレが！！」

「あーはいはいはいはい！ 悪かったよ冗談だって！ 頼むから静かにしてくれよ！ 俺は集中したいの！」

「あはは、すまんすまーん」

くそーにこにこ笑いやがって……何がそんなに嬉しいんだよ……。

「つーかさ、待ち合わせじゃねえの？ 探すんだ？」

「あー……うん。ちよつと様子見ただけだからさ……」

靴箱がある方から人の群れが出てくる。

「ふーん？ で、どんな娘なんだよ？ モテモテ塚松兄はどーい
うのが好みなの？」

「モテモテって……」

女子、男子、女子女子女子……うなあ……

「事実だろー？ 塚松クンは力才がいいからなっ！ この前もあの娘にさー、」

「ちよつ、やめろつて！！ 指差すな！！」

「はいはい。ははっ」

けらけらと笑う。

「全く……あの娘は……凄い良い娘だよ。素直でさ……でも
すつこい控えめ。」

「へえー。大人しい娘が好みなんだ？」

「どうなんだろうなあ……」

大人しい娘が好みと言うよりは、ただ彼女を可愛いと思うだけな気がする。

いや、口には出せません。

「ふーん？ で、見た目は？」

「見た目？ なんてそんな事までお前に言わなきゃなんないんだよー……」

男子、男子、女子……違うな……うわ、やばっ目が合った！

「鈍いなー。優しいオレはキミの想い人を探すのを手伝ってやろうと思っただよ、塚松くん。髪型とか何かあんだろー？」

「……」

「なんだよ？ 文句あんのかよ？」

「ふ、……いや、無い無い。そうだなあ……茶髪で、そう、見た事ないくらい長い髪で……」

「じゃあとりあえず茶髪ロングの子を探せばいいんだな！ わかった！ 俺が見つけてしんぜよう！！ どーこーだー？」

今日の敵は急遽味方に変わったらしい。

髪が長く、茶色の娘を見つけては『あれは？ あれは？』と言ってくる。

常にふざけてるけど、結構良い奴なんだよなあ。

「はあーあ、結局見付かなかったなあー。っーかさ、お前クラスくらい聞いとけよ！ 1年の茶髪ロングだけじゃ情報少なすぎ！」
予鈴も鳴り終わり、いよいよ集会が始まる時間になってしまった。そろそろやめにしないと教師に怒られそうだ。

「ごめんごめん、でもおかしいなあー、絶対見つかると思ったん

「ただど……わっ、すみません！」

「すれ違った女子とぶつかってしまった。この人は茶髪だけど、シ
ョートだし先輩っぽいし……違うな。」

「お前なー、好きな奴も見つけられないのは重傷だぞー？ もつ
と神経磨きなさい！！」

「はいはい……つと、ごめんね。」

「この子は黒髪おさげか……眼鏡かけてるし明らかに違うな。は
あー、なんで見付かないかなあ。」

「お前ぶつかりすぎ。何人目だよー？」

「……五人目？ ……やっぱさ、俺達だけじゃ駄目なのかもなー。
浩介が居たらもつと早くに見つけられそうなのに……あいつ、はや
く退院しないかなー……」

「お前……」

「え？ 何？」

「いや……ほら、速く行こうぜ！ 遅刻もしてないのに担任に殴
られたら最悪だーっ」

「うわっそうだ！ ちよっ、待てよ置いてくなっ！！」

しかし、その後も俺は彼女の姿を見付けることができなかった。

次の週も、次の週も。

どうして見付からないんだ……だんだん焦ってくる。

もしかして登校拒否なんじゃないかとあいつは言ったが、本当に

そうなんだろうか？

だから学校で会おうと言ったら困ったのか？

速く、速く土曜日になれ。

早く会いたい。

すぐに会いたい……………

「塚松兄さ、そんなにその娘の事好きなんだなー。オレはさ、……
……てつきりお前の頭の中は、塚松弟の事でいっぱいなのかと思って
た。」

「浩介ー！？　なんであいつの事ばかり考えてなきやなんない
んだよ？」

「……双子だしさー……」

「お前なー、どういう理由だよ……」

「……」

「なんだよ？」

「……いや、お前……変わったみたいで、良かったよ。」

「はあ？　お前……」

「何さ？」

「やっぱキモい……」

「なにーっ！？ この親切な俺にキモいとは何事だーっ！！」

友人は良い奴で。いつも俺の事を慰めてくれて。

でも、ごめん。俺にはそれだけじゃ、足りなかったみたいだ。

第五話 塚松（後書き）

今回は塚松と友人君の会話が書いていてかなり楽しかったです。友人君テンション高いですね！（笑）

さて、お話はそろそろ本題に入っていくと思います。

暗くなるので、次から後書きは無いかもしれません……

第六話 愛しい君は・・・

土曜日。

いつもなら、ダンスを見終わってくだらない話をしているはずの頃。

俺とバイオレットは黙ったままだった。

「……………」

やっと会えたのに、なにを話せば良いのか分からない。くだらない話題も今日は出てこない。何故だかバイオレットも話し掛けてこない。

『学校に居なかったでしょ？ 見付けられなかったんだけど』
訊きたい。でも、そんな事を言ったら探していた事がばれてしまう。

どうすればいいんだ……。

「…………… やっぱり……………、塚松君はあたしのこと、見付けられませんでしたね……………」

「え……………」

「この前の月曜日もその前の月曜日も、もう一週間前の月曜日も……………、お友達と運動場のベンチに座ってましたよね……………？ あたし、見てたんです」

「え！？？」

見てた……………？

「やっぱり、気が付いてなかったんですね……………。実は、ぶつかっ

たりも、してて……」

「……」

どうして？ あんなに探したのに。あんなに会いたいと願ったのに。どうして見付けられなかったんだ？

だって、バイオレットは居なかったじゃないか。バイオレットは……

「塚松君……」

「……あ……」

目の前には、小窓の奥には、いつも通りバイオレットが居た。長い茶色の髪は今日も綺麗で、顔は、やっぱりおかしな方向を向いていて……

……『見てた』？

バイオレットは目が見えないんじゃないのか？

バイオレットは、バイオレットは……？

彼女は一度も自分は目が見えないなんて言っていない……

でも、俺の事は一度しか見てないって。そう言ったじゃないか。

なんなんだ？ 『見る』って？

どうして？ 俺には、目の前のバイオレットが見える。なのに、

外ではバイオレットを見付けられない。

『塚松君は、あたしの声しか知らないから……』

「塚松君……、あたし……聞いたんです……」

混乱する俺に追い討ちをかけるように、彼女は言葉を放つ。

今日の彼女の声色は少しおかしかった。

怒ってるとか、そう言うのじゃなくて……だけど、なにか……違和感があった。

「弟さんの、事……」

弟？ 浩介？ 浩介の事？

「浩介……？ あいつなら、今日も見舞って来たけど、別に……」

「……、……」

？ どうかしたんだろうか？

浩介は、ずっと入院してるけど結構元気で。ほら、だって、さっきもあいつの病室で……

病室で……？

「 浩介、は ……」

頭がおかしくなりそうだった。

毎週土曜、俺は、浩介のお見舞いに来るために病院に来ていて、
そう、バイオレットに会いに来るのも、その、ついで、で……

『ほら、あの子……可哀相ね、また来てるわ……。あの日から、
あそこに通ってるみたいなんだけど……』

あの日……あそこ？ 小窓……最初に来た日も、俺はお見舞いの
帰り……。

違う。

あの日は ……

「 つ……! 」

「つ、塚松君！？　大丈夫ですか！？　あ、あたし……っ」

「バイオレット……！」

気が付いたら、彼女の手を引いて、庭を抜け出していた。

彼女が小窓を越える時、声が聞こえたような気がしたけど……そんなもの、俺には聞こえなくて。

愛しい君は、今俺の手の中。

第七話 violet

気が付いたら、俺は自分の家の近くに居た。

病院からここまで歩いて来てしまったらしい。

バイオレットは何も言わずに、俺の手についてきてくれていた。

真っ暗な場所が、現実が腹をえぐって、内臓にのめり込むような感覚がした。

胸が詰まる。苦しい……！

「ごめん……、バイオ、レット……」

「……」

青空が見えた。必死に声を振り絞った。

「……俺……ずっと、あいつの、弟の見舞いになんか……行つてなかったんだ……」

「……」

夏の太陽は肌を焼き、目眩をも引き起こしそうになる。

「自分で、ずっと、行ってるつもりになってた、だけ、で……」

「……」

吐き気がした。頭痛もして、ふらふらした。

思考の全てが、暗闇に沈んでゆく気がした。

「ホントは……、浩介は……、……バイオレットに初めて会った日に、……」

「……」

「……っ」

うけとめられなかった。

言ってる今も、現実感が湧かない。

確かめるために、家まで歩く。

「バイオレットは、……それを、聞いたんだ……？」

「……」

「……バイオレット……？」

見てみると、バイオレットはともぐったりしていた。

「バイオレット！？」

しかし、彼女は答えない。

体制を代えようと思い、手を放す。

かしゅんっ

「バイオレット！」

「……」

「バイオレット、バイ……」

抱き上げても応えは無い。

「……塚松君！」

誰かに呼ばれた。

振り向くと、黒髪をおさげに結った、眼鏡をかけている少女が立っていた。

息を切らし、肩を揺らし、汗だくで俺の方を見ている。まるでやっと思付けたとも言つよつに。

「誰……？」

「……っ！」

「なあ、バイオレットが動かないんだ……！ 病院……そう、救急車！ 呼んで……！」

「 塚松君……っ！！ バイオレットを、よく、見て……！！ バイオレットは、……っ」

少女はなぜか泣き出しそうな声で俺に訴える。

俺は、彼女の言う通りにバイオレットを見てみた。

俺に抱かれたバイオレットの体は、地面へと向いている糸に従うようにだらりと垂れ、全くとして動かない。

50センチしかない体は、バイオレットのもの。

「……バイオレットは……人形だよ……」

泣き出しそうな少女が言った。

バイオレットはマリオネットだった。

手を離せば、『かしゅん』と音をたて、墮ちるモノ。
強い力で引いた糸は、無惨にもひきちぎられ……。

彼女が崩壊を確信した頃。

俺はまだ、なにも分かってなくて。

ただ、いつかの棒アイスを思い出していた。

原型はもう、分からない……？

第八話 哀玩人形

「……バイオレットは、人形……？」

「君は、誰……？」

「あたしは……あたしは、堇、です……」
「そう……。スマレ……」

堇はなぜかとても哀しそうな顔をしていた。声には全く力が無かった。

彼女の手には、バイオレットのものと思われる、人形を操るための取っ手のような物があつた。

でも、そんな事はどうでもよくて。

「人形……？ 駄目だ……違う……！ バイオレットは、バイオレットは……っ」

触れた髪は？ 唇は？

可愛いと、愛しいと思ったのは、やっぱり腕の中にいる彼女。頬を撫でる。冷たい、人形の感触。それでも、やっぱり……

「……っ」

涙が出た。

崩壊でごまかしてた涙が。

崩壊を愛おしいと思う涙が。

人形でも構わない。

やっぱりバイオレットが好きで、好きで……。

きつく抱きしめると、バイオレットの体はぎしぎしと変な音を立てた。

漠然と、分かったことがある。

俺は絶望に襲われて。

壊れた俺は、狭い、狭い小窓の奥に踊る人形を見つけて。

人形は俺の逃げ場所になった。

彼女を好きでいる事で、俺は現実を忘れ、癒されていた。

でも結局、

自分はさらに崩れてしまって、絶望にはなんの変化も無かった。

ただ、いつの間にか、本当に彼女が愛しくて愛しくてたまらなくなっていて……

哀しい気持ちは、愛しく玩ばれる人形を作ってしまった。

哀玩人形

第九話 董

やっぱり、そうだったんだ。

月曜の活気と、休み明けの少し気だるい雰囲気がちこめる頃。

あたしは運動場の端に居た。

「……………はぁ……………」

ため息が出た。

この前の土曜。せっかく塚松君が会わないかと言ってくれたのに、嫌がって断ってしまった。

失礼だったよね……………。

塚松君に会うのが、嫌だったわけじゃないの。
ただ……………

「つーかーまーツううあにーっ！……」
ばこーん

ええ！？　びつくりした！！　凄い声！！　凄い音！！　痛そつ
！！

っていつか……『つかまつあに』って……え、もしかして、塚松
君の事……？

声がした方を見ると、そこにはやっぱり塚松君の姿があった。
うわっ！！　何で居るの！？　学校で初めて見た！！　目開けて
るのも初めて見た！！

うわああーなんか恥ずかし……

っていつか何できよろきよろしてるのぉー！？　誰か探してるの
かな？

嫌ー！！　こっちは見ないで！！

はっ！！　まさか探してるのって、あたし！？　違う違う！！

勘違いもいいかげんにしろっ！！

あーあ……それにしてもやっぱり……

「おはよ、董！」

「あつ、おはよう」

自分の思考の波に乗りまくっていたら、数少ない友人の一人が話
しかけてきた。

彼女の綺麗に整えてある髪は少し茶色に染まっっていて、胸のあた
りまで伸びている。

今時の娘って感じで凄く可愛い。

「董さー、」

ああーっあんまり大きい声であたしの名前呼ばないでーっ……な
んでこんなあたしだけに都合のいいお願いしちゃだめだね……っ
ていうか、塚松君はあたしの本名知らないから関係無いか……でも
バイオレットの和訳だし……すぐバレそう……。

「？　何やってんの？　さっきからおろおろしちゃって……そう、

私が話しかける前もなんか様子がおかしかった……っていうか、怪しかったよ?」

「嘘っ!?!? え、態度に出た? ええー!?!?」

「ホント。気を付けなよ?」

「うん……。教えてくれて、ありがとう……」

はあ……。だからあたしは駄目なんだ……。

不器用で、無配慮で……。気を付けなきゃ。

「てかさ、堇、さっきあのセンパイの事見てたでしょ?」

「え?」

「だからー、塚松センパイっ!」

……っ!

「うわあぁっ!?!」

そんな大きい声で言わないでー!?! ……これも言えないや……。

「……っっていうか、何で知ってるの!?!」

「何でって、めっちゃ見てたじゃん」

「そうじゃなくて! あ、いや、それもそうなんだけどね、つか

ま、あ、あの先輩の事……!」

「はあ? 知らないわけ無いじゃん! 有名だよー? あのセン

パイ」

「ええ!?!? 何で!?!?」

「やっぱり知らないんだー……ホントあんたはそういう話に疎いねー。見てたんでしょ? あの容姿だよ!?! モテないわけないじゃん!?!」

「ああ、そっかぁ……。そうなんだ……。あはは、そりゃそうだよな

……。……ホント、格好良いよねー……」

塚松君は本当に格好良かった。

顔は同じ世界の住人じゃないんじゃないかと思うほど整っていて、足が長くて背はそこそこあるし、何より清潔感がある。

彼が『バイオレット』にキスをする時、間近で見てしまった自分が犯罪者みたいに思えるくらい素敵な人で。

「……あたしなんかには、全然釣り合わないよね……」

「董？」

「あはは、ごめん……」

会えない。

ただでさえあたしは不細工で。眼鏡で黒髪で。あたしの顔を見たら、きつと彼は……。

あたしの部屋には、小窓がある。

隣の病院の庭に面していて、日当たりはそんなに悪くない方角だけど、下の方にあるから草に遮られてあんまり光は入ってこない。

普段はベットの影に隠れて、全く窓としての機能を果たしていない、小さなスペース。

でもそこは、あたしにとっては小さな劇場で……。

ただ、昔なんとか会のビンゴが何かで当てただけの、可愛い茶色い髪の操り人形。

バレエの習い事がどうしても上手く出来なくて、とうとうやめた時にやっぱり名残惜しくてこの子を躍らせてみた。

やっぱりこれも上手く出来なかったけど、時々生きてるみたいに動くのが嬉しくて頑張って練習した。

親に見られると『もう受験生でしょう？ 勉強しなさい！』と怒られるので、ある時からベットと窓の間で密かにやることにした。

あんまり人も来ないみたいだし、大丈夫だよね……。

ベットの上に座って、手を動かして人形を舞わせる。

『なにしてんの？』

あー……人の声がする……。

でもこんなのに気が付くわけないよね。違う違う。

『なあ、なにしてんの？』

……ああ、つと、よかつたひつかかんかった……

『おーい』

……

『え、あたし！？』

初めてだった。初めて人形の踊りを褒めてくれて。もっと人に見てもらった方が良くと言ってくれた。

窓の外に座った彼。ベットの上からは、顔が見えないや……

『そっちの名前は？』

『名前、ですか……名前は……』

そっちの……って言うんだから、人形の名前でもいいよね……

『バイオレットです……』

バイオレット。

あれから塚松君は、『可愛い』って言うてくれたり、『また会いに来る』って言うてくれたりした。

だから、あたしの事を嫌いじゃ、ないと……思う。

でも、彼はあたしの顔を見ていないわけで。

一度『バイオレット』にキスをしてくれた時に窓を越えて来て見えた彼の顔は、恐ろしいほど整っていて。

彼はこの前あたしの顔が見えていると言ったけど、嘘だ。ベットの上のあたしの顔が見えるはずない。現にさっきから何度もあたしの方を見てるけど、何の反応も起こさない。

やっぱり……会えないよ……

「董！ 話はまだ終わってないんだけど？」

「……え？ あ、ああ、ごめん……」

「もー……まあいいわ、あんた最近は減ってきたもんね」

「え？」

「で、あのね、あのセンパイが有名なのにはね、もう1つ理由があるの」

「……え……？」

「塚松兄弟って言って、あのセンパイ、双子だったんだよね」

「双子！？」

「弟さんが入院してるとは聞いてたけど、双子だったの！？ ええ」

「……双子……ああだから『塚松兄』って呼ばれてたんだ！ へえ」

「……」

「そうなのよ。あの顔が二人よ？ 物凄いよね」

「う、うん……」

物凄い。

「でもさ……、弟さんの方は、病気で……」

「あ、入院してるんだよね……？」

「はあ？ 違うよ！ 何言ってるの？」

「え……、……違うの……？」

「だから、最後まで聞きなさいって……弟さんはね、……、春に……」

「……」

「……え……？」

「あそこに居る塚松センパイ……お兄さんの方は毎週お見舞いに行ってたらしいよ。そういうのもあってさ、なんかさらに有名にな

「っちゃったみたいで……」

「嘘、でしょ……？」

「可愛そうな話だけど、嘘じゃ……ないよ。」

嘘……うそ……！

だって、塚松君、いつもお見舞いのついでにあたしの所に来るっ

て……

「……塚松君……！」

「ちよつと！ 董！？」

行かなきゃ……塚松君の所へ。

でも、あれね……ふらふらして、上手く、歩けな、い……

「ちよつと、董！ どうしたの、大丈夫！？」

あ ……こっちに向かって来る……？

「はぁ、あ、結局見付かなかったなあ。つかさ、お前クラ
スくらい聞いとけよ！ 1年の茶髪ロングだけじゃ情報少なすぎ！」

え？

そこから先の会話は、もうあたしの耳には入ってこなくて。

ドンッ

「……つと、ごめんね。」

あ

「お前ぶつかりすぎ。何人目だよー？」
「……五人目？ ……やっぱさ、……」

「董……？ 顔色悪いよ？ 大丈夫？」
「あ……う……うん……」

なぜか、あたしは思ってしまった。分かってしまった。

塚松君が探していたのは、『バイオレット』なんじゃないか、って。

彼の精神は、もしかしたら崩壊しているのかも知れない……って。

やっぱり。

彼の心は崩れていた。

ずっとずっと、弟さんが生きていると勘違いしていて。

塚松君が探していたのは、可愛いと、会いたいと言ったのは、
『バイオレット』……人形の事だった。

声を聞いても分からないなんて、相当、重症。

泣いてる彼を見た。

泣いてる自分が居た。

……どうしたら、彼を助けられるのか。考えなきゃ。

第十話 哀嬬回想

「来て……」

夕空がまだ明るい頃。

俺は董を連れて、再び家へと歩き出していた。

董は「はい……」と言だけ言って、俺の後をしっかりと着いて来てくれている。

バイオレットの持ち主。バイオレットを操っていた人。それが董だと言う事は、この時の俺はもう理解できていた。でも、彼女にはなんの感情も湧かなかった。腕の中にはバイオレット。

現実を見に行くために、俺は歩く。また零れ落ちそうな涙を抑えて、前を見て。

一人は怖い……だから、董に着いて来てもらった。

バイオレットは動かない。

「董、少し……話していい……?」

「……はい……」

家まで、もうすぐ。

苦しい。

「浩介はさ……本当に駄目な奴で……双子なのに俺よりずっと繊細で、すぐにへこんで、部屋は汚くて……でも、……俺なんかよりずっと良い奴で……器用で、気遣いもちやんとできて……憧れ、だったんだ」

「……はい……」

「あいつが入院したのは、去年の冬だったかな……。メールして
らと思ったら、突然、息苦しいとか言い出して……」

「……」

「入院したばかりの時は凄くてさ、毎日毎日、なん人の女子が見舞いに来た事が……。あいつ、人が来るたびに疲れてたのに、ちゃんと全員に『ありがとう』って言ってた……。偉いなあって……
思ってたんだ」

「はい……」

家の門が見えた。

吐き気が酷かった。嘔吐感の代わりに、言葉が出てくる。

止められない。言い続けないと、叫んでしまいそうで。

「でも、あいつ、日に日に発作の回数が多くなって……医者には、ストレスだ……って、言われたらしいんだ。だから、俺、皆にもうあんまり来るなって言っただ。やっぱり、人が来るとストレスも溜まると思って……。俺も週に1回だけ、行くことにしたん

だ。皆よく分かってくれて、それから来る人も大分減って、発作の回数もだんだん減っていったんだ」

「はい……」

「でも、誕生日、……沢山の女子があいつにプレゼントを渡したがって……だから、あいつ……みんなを呼んでって言ったんだ。だから、皆を、あいつの所に連れてって……」

「はい……」

「あいつは、凄く喜んで……また、皆や、俺に、『ありがとな』って。それから、……それから……、……」

きい……っ

「……董……来てくれる……？」

「はい……」

ありがとと笑って言って、ポケットの中から鍵を出す。
家の扉が、開かれた。

「……」

玄関を抜けて、真直ぐ2階に上がる。

短い廊下の突き当たり。右は俺の部屋。左は、……あいつの部屋。

ドアノブを握る手が、熱くて震える。

「それから……その、次の日……」

「……あ……」

「あの日……あいつは……また、発作を起こして……」

手に力が入らない。どっちに引けばいいのかわからない。

「その日が……『バイオレット』に会った日、ですか……？」

「……うん……」

バイオレットを抱いている事をすっかり心において、

俺はドアを開けた。

なんの変哲も無い、普通の部屋だった。窓があつて、机があつて、ベットがあつて。

でも、やっぱり違った。

あいつの部屋が、こんなに片付いてたこと、あつたか？

整然と並べられた教科書、ノート。いつもは床に散らばっていて、かばんは1つも落ちていない。いつもはそこらじゅうにほかりっぱなしで。

プリントで生め尽くされていたはずの机には、小さな花が飾ってあった。

「塚松君……っ」

声が聞こえた時には、俺はバイオレットを抱いたままで床に崩れ落ちていた。

世話の焼ける奴が居ない。
憧れが居ない。

片割れは居ない。

やっぱり、死んだんだ。浩介は、あの日。

あの日を思い出していた。

病院に着いた時、あいつはもう動いてなくて、
触れてみると、人形みたいにつめたくて。

死んだ浩介を見て、哀しかったんだ。

生きてる人形を見付けて、嬉しかったんだ。

「バイオレット……踊ってくれる……？」

第十一話 ・あたしの崩壊・

「たた、たんたん、たんたん、たたたん、たたたん、たた……」

静かな廊下。響くのは彼女の唄声。

座ったまま、壁に寄りかかってバイオレットを見る。

なんとか繋いだ糸は、思ったよりも上手く動いてくれている。

「こんぺい糖……」

バイオレットは前よりもずっと上手に踊っていた。
いつも足が糸に絡まって倒れていた所も、もう失敗しない。

そういえば、彼女が唄うのを聞くのは初めてだ。

うつすらと自分が微笑んでいるのが分かる。

優しい唄声。

哀しい唄声。

「たん……。終わりです……」

「……上手くなったね。頑張って練習したもんね……」

「……」

きしむ音。

奏でられるのは無音の旋律。
最初に見た、あのリズム。

「あたしは……自分に自信が無くて……」
「……？」

「いつも、怖くて……なかなか出来ないあたしを、否定されるのが、辛くて……。そんな自分自身が嫌で、嫌で……いつも、誇れない自分に謝って……」

「不器用で、無配慮で……友達も少なく……だから、自分で自分を、戒めるようになって……何も、主張が、出来なくなって……人とも、顔を合わせるのが怖くて……」

「うん……？」
バイオレットは舞い続ける。

「……でも……塚松君が来てくれてからは……少し、安心できる

ようになって……。いつもいつも、あたしを元氣付けてくれて……
優しい言葉をくれて……。自虐的になりそうになると、いつも止めて
くれて……。ちよつとずつ、頑ななあたしを、崩してくれて……」

……氣付いてたんだ……。

「いつか、顔をだそう……。って、思ってたんです……。会おうっ
て言われて、嬉しかったんです……。！でも、やっぱり、ただ……
怖くて……。あなたは凄く綺麗な人だから……。もし、本物のあたし
を見たあなたが、失望した顔をしてたらって、思ったら……。どうし
ても出来なくて……。会えなくて……」

「……」

「優しい人を、失いたくなくて……」

「でも……」

……がしゃんっ

「あ・……………っ！」

突然、唇を塞がれた。

触れた君は、とても温かく……

「……っ……やっぱり……あたしのこと、見て……？　あたしは、あなたが、好きだから……っ……」

董は俺の手を握った。温かい。温かい。

「小窓ごしじゃ、嫌なの……！　怖かったけど、会って、話す方が、ずっといいよ……なのに……ねえ、どうして……そっちばかり、見てないでしょ……！　あたしはここなの。董が、あなたを好きなの……！」

「すみ……」

「また壊れるのは、嫌だよ……！　ねえ、あたし、あなたのお蔭で変わったんだよ……？　分かる……？　ちよつとずつだけど、ちゃんと喋れるようになって。自分の気持ちを、言葉に出すことが出来るようになって……！　こんなのと比べられるほど、塚松君の痛みは軽い物じゃないと思うけど、でも……塚松君が弟さんのことを思うように、私もあなたに憧れるから……そんな姿で、居て欲しくないよ……あたしが、助きたい……お願い、変わって欲しいの……！　崩壊を、崩してよ……！」

目の前には、手の中には。体温があつて。

浩介じゃなくて。人形じゃなくて。

そこには董が居た。

最初に言葉を交わした彼女からは、想像する事も出来ないような強い言葉を紡ぎ出す。

自分が崩壊してる時、董も崩壊してたのか。

振り絞られる強いきもち。

床に落ちている哀玩人形。

慰めてくれたのは、誰？

本当に触れて、支えてくれるのは、何？

愛しい君は……

そろそろ時間だと、浩介の声が聞こえた気がした。

最終話 崩壊続行

「スマレってね、スイートバイオレットとブルーバイオレットがあるんだって」

「へえー？ 何が違うの？」

「……わかんない……」

「あはは、まあ、さ、そのうち分かるよ！」

「……うん……！」

スマレが咲き乱れる頃。

俺は春の病院の庭に来ていた。

でもそこは小窓がある場所じゃなくて、もっと人目につく所。

隣には彼女が居て、にこにこして話している。

可愛いなあ。

ああー駄目だ俺！！ 我慢だ俺！！

冬が終わる頃から、俺達は毎週のようにここで人形劇をするようになっていた。

お客さんは入院している患者さん。

彼女はまだまだ緊張してるけど、皆に楽しんでもらえて嬉しいみたいだ。

バイオレットは、まるで生きているかのように動いてる。

でも、もうあの時みたいな感情は抱かない。

あの夏の日。

彼女は俺をあ崩壊から救ってくれて、やっと現実を見させてくれた。

つめたいものに囚われていた俺に、温かい血が通うのは、会って話せる、会って触れられる人だと教えてくれた。

崩壊は崩れ、また始まって……

「今日はここまでです！ 皆さん、ありがとうございました……！」

「ありがとうございましたー」

「……あのね、スミレの話なんだけど……花言葉は知ってるの。英語の辞書に書いてあったから……」

「ふ、英語の辞書かよ！」

「な、悪かったですねーっ！」

「はは、ごめんごめん、それで？ なんだったの？」

「もー……それでね、花言葉は……スイートバイオレットが『素朴』、ブルーバイオレットが『愛』と『忠実』なんだって」

「じゃあキミはスイートバイオレットだな！ 素朴だし……くく……」

「ちよつと、笑わないでよーっ！！ 塚松君みたいに格好良い人とは違って、どーせ素朴ですよ！ でみつあみですよ！」

「みつあみは可愛いからいいよ」

「！！……ホント？」

「ホントホント」

変わったなあ。

もう言葉に怯えは無く、真直ぐ俺を見つめてくる。

愛しい君は、目の前に居る、堇。

「つていうか、塚松君はバイオレットが『愛』とか『忠実』とか言いたいんでしょう？」

「そうだなー、堇はバイオレットみたいに忠実じゃないからなー」

「ええー！？ ホントにっ！？」

「あはは、冗談だよ。でもさ、忠実じゃなくてもいいだろ？ 堇は、変わるから」

「？ どう言うこと？」

微笑んで言うと彼女は怪訝な顔をした。

愛おしくて、また笑ってしまった。

変わるから。崩壊するから、俺達は生きてける。

崩壊続行。

生きてる限り、それは続く。

「董がスイートバイオレットなら、俺は虫かな。」

「虫！？ 何で！？ 虫は嫌ー！！！」

「おいおい……そんなに嫌がんなよー……甘い方に、虫は行くだろ？」

あたたかい春。

哀しさはきつと消えないけれど、

君が居るから、俺はもう大丈夫だよ。

キミは、愛する事を願ってくれる？

哀玩人形はだんだん崩れて、愛願人形になってゆく。

誰もが崩し崩され、今日も世界は変わってく。
君の世界をもっと素敵なものに変えられるように、少しでもいいから変われるといいな。

最終話 崩壊続行（後書き）

哀玩人形はこれで終わりです。
いかがでしたでしょうか？
何かを感じていただけていたら幸いです。
ここまで読んで下さって、本当に本当に、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956a/>

哀玩人形

2010年10月28日04時54分発行